平成 16 年度第 1 回日本生物物理学会運営委員会議事録
日時：2003 年 9 月 25 日（木）12：00～
場所：ROOM306，307
出席者：石渡会長、美宅副会長（平成 15 年度年会実行委員長）、有坂、石島、片岡、金城、国岡、諏訪、永山、安永、若杉、薬師、各運営委員、森島平成 16 年度年会実行委員長、石森平成 16 年度年会実行委員、新田平成 17 年度年会実行委員長、阿久津会誌編集委員長、河合秘書
報告事項：
1　平成 15 年度年会報告（美宅）
美宅実行委員長より報告があった。参加者は 837（事前登録）と 600（当日参加）の 1437 人。年会の参加者は年々増加している。600 人強の懇親会参加者があった。収入は参加費（490 万円）、懇親会費（420 万円）、広告収入（展示を含む）780 万円、ランチョンセミナー（400 万円）、新潟県からの補助 700 万円、予稿集関係 500 万円の計約 3300 万円。一方、支出は 3500 万円程度となり、約 200 万円の赤字が予想される。収入、支出ともに 5％程度の誤差だと思われる。支出の内訳のうち、大きなものは、会場費（700 万円：生物物理学会の負担；総額 1100 万円；会場使用料については神経化学会と使用時間か使用面積（ポスター演題数）で分配する）、新潟県のイベント業者に 1700 万円程度（学生のアルバイトを雇わなかったため高額になった）。最初の予算は 2100 万円程度を考えていたが、支出が 3500 万円まで膨らんでいった。その大きな理由はイベント業者の費用 1700 万円であるが、運と努力により参加費（参加者の増加）と広告収入（含ランチョンセミナー）に恵まれた。
正式な決算は次回の 12 月の運営委員会において報告する。赤字の 200 万円はあらかじめ準備金として預かっている 150 万円をそのまま返還しないで使わせていただきたい。ただし、大学以外の会場で行うならば、参加費の値上げを考えた方が良い。
石渡会長「懇親会単独でみたときの収支のバランスはどうか？」
美宅実行委員長「全然合わないと思われる。」
永山委員「来年の京都では、赤字を出さないようにどのような対策をとるのか？」
森島平成 16 年度年会実行委員長「学生のアルバイトを雇って会場運営を行う。」
永山委員「積極的に学生を雇った方がいいでしょう。」
美宅実行委員長「合同で行ったこと、大学の外でやったことは数字にこそ表れないが、学会としてポジティブに働いていると思う。」
永山委員「事前に神経化学会の演題内容がわかる方が良かった。」
美宅実行委員長「事前登録をした方には合同プログラム集を配った。」
石渡会長「タイトルだけではなく内容も知りたい人も多いはず。」
永山委員「合同の要旨集があった方がベストだったと思う。」

美宅実行委員長「合同プログラム集は完全にエクストラな支出である（予算をつける必要がある）。」
美宅実行委員長「規模が 3000 万円を超えると、補助金の申請ができると聞いたことがあるので、確認して検討する。」

2　平成 16 年度年会準備状況（森島）
平成 16 年 12 月 13 日（月）から 15 日（水）、京都国際会議場において行われる。会場費は約 900 万円。収入はランチョンセミナーとアカデミック版ランチョンセミナー（つまり、会場費を負担することのできるシンポジウム。例：たんぱく３００プロジェクトなど）でなんとかできないかと考えている。会場運営は可能な限り会員で行う。10 以上の各研究室の構成員の援助をいただくつもり。広告収入も可能な限り努力する。新しい試みとして外からのシンポジウムを入れるわけであるが、その候補はこれから運営委員会に提案してゆくつもりであるので議論して欲しい。京都でもう一つ提案したい事として、京都から発信する「10 年後の生物物理」というような萌芽的テーマ・方法論のブレークスルーといった内容のシンポジウムを実行委員会の企画として行いたい。例えば、自由電子レーザー・サブミクロン領域の MRI といった、特に若い人たちが魅力を感じるようなシンポジウムを企画したい。もう一つ、他の研究組織との共催の可能性について。特にヒューマンフロンティアサイエンスプログラムからシンポジウム共催の打診があった。ヒューマンフロンティアとしては生物物理学会を宣伝の場にするのが目的であるようなので、これを受け入れるのは疑問を感じる。現在、交渉中である。
石渡会長「ヒューマンフロンティアは独立したシンポジウム（プリナリー、裏に他のシンポジウムのない）を開いてほしいようであるが、それは絶対条件ではないと理解している。」
森島実行委員長「最大 24 件のシンポジウムを開催できるが、独立したシンポジウムを入れるとなると、他にできなくなってしまうので、受け入れがたい。」
永山委員、石渡会長からは、午前中に短いプリナリーシンポジウムとして開くくらい（場合によっては二日に分けて）は可能ではないかという意見が出された。この意見をふまえて実行委員会では交渉を進めることとなった。
登録システムの説明が一文字実行委員からあった。従来どおりの UMIN を用いる Web 登録にする予定であることが報告された。シンポジウムの数を確保する意味も含めて、京都ではポスター発表を考えている。ポスター会場は京都国際会議場のアネックスホールで行う予定。
美宅平成 15 年度年会実行委員長「オーラル発表の機会を与えるということで新潟では 3 件のポスターセレクションシンポジウムを企画した。」

永山委員「あれは良かったので是非継承して欲しい。」
片岡委員「説明義務時間の設定をもっと良くして欲しい。」
といった意見が出され、京都年会で積極的に検討することが確認された。
新田平成 17 年年会度実行委員長「ポスターにするかオーラルにするかというのは決まりがあるのか？」
美宅平成 15 年度年会実行委員長「一年おきに変えるという習慣はあったと思う。」
森島実行委員長「京都では会場の関係からポスターにしただけで、オーラルにしたかった。」
石渡会長・永山委員「学生にとってはオーラルの方が良いでしょう。」
片岡委員「学振の申請書ではオーラルは業績になるのにポスター発表は業績にならないという問題もある。」
新田平成 17 年度実行委員長「実行委員会に持ち帰って議論したい。」
石島委員「昨年の名古屋ではプロジェクターの問題があったので、それを克服しなければならないでしょう。名古屋ではプロジェクターの準備を含めて発表者の責任でやってもらった。試算をするととてもできそうにない額だったので、原則的に OHP を使うことにした。」
美宅平成 15 年度年会実行委員長からは、一般論と断りを入れて「今回は東京で受けた話だったが、合同という事情もあり、新潟で開催した。つまり、そういうことが可能なので、いい会場でリーズナブルにできれば、開催地にこだわる必要はないでしょう。ただし、会場近辺（今回は新潟）に誰かはいた方が良い。新潟には生物物理の会員はあまりいないこともあって、今回は神経化学会にほとんど依存した。」
石渡会長「北海道では共催の可能性は？」
新田平成 17 年年会度実行委員長「まったく考えていない」
石渡会長「他学会と共催ということを評価しなくてはならない。また、どういう学会と共催するするかを検討しなくてはならない。現在は、生理学会との共催の可能性がある。」
美宅平成 15 年度年会実行委員長「今回の共催はちょうど 2 年前に「日本の科学技術の発展のために」ということで始めた。」
石渡会長「北海道かその次で共催の可能性を考えましょう。次の運営委員会までに。」

議　題：
1　新運営委員の役割分担　　（石渡；資料：議 1）
新しい役割分担が石渡会長から提案された。新しい試みとして「女性・若手会員問題検討委員会」の設立を提案された。石渡会長からは栗原委員を代表にした 5 委員

（国岡、諏訪、宇高、若杉、薬師）を構成員とする案が提案された。これは 12 月、7 月の年二回程度、運営委員会の前に開催し、可能ならば年会で何らかの企画を行うというものである。また、「研究体制問題委員会」については、科研費の問題など流動的に研究体制問題（若手の研究体制を含めて）を議論してもらうもので、やはり可能ならば年会での企画を行う。この委員会には三木委員を代表とし片岡委員の名前が挙げられた。
諏訪委員「男女共同参画問題については京都の年会においてミーティングではなくシンポジウムのようなものを行って欲しい。」
森島実行委員長「（男女共同参画問題のシンポジウムのために）空けておきます。」
出版委員会（WG）は、引き続き美宅副会長を中心に安永委員等の名が挙げられた。
新運営委員の役割分担としては、副会長に難波委員、庶務に宇高委員、広告に石島委員、書記に若杉委員、経理に石島委員、年会に金城委員、会員に国岡委員、物理学会連絡に金城委員が中村委員をサポートする形で、出版に安永委員、外交（国際交流）に難波副会長、企画に片岡委員、ホームページに安永委員と金城委員がサポートとして、女性会員育成に国岡委員と宇高委員、賞・助成金推薦委員会に美宅副会長、選挙管理委員長に船津氏（非運営委員）を挙げられた。特に金城委員にはホームページ担当（安永委員）のサポートや物理学会連絡担当（中村委員）のサポートを依頼された。
石渡会長「各委員とも資料の生物物理学会運営方針メモを読んで担当の仕事を把握して欲しい。三大重点施策として、e-journal の設立、国際性の推進、若手・女性研究者支援を考えている。」特に企画に関しては６０万円計上されている啓蒙事業予算が使われていないので、高校生向けパンフレットの改訂を行うなどの啓蒙事業に充てて欲しい。
永山委員「研連窓口委員については科研費の問題などとても大切な問題なのだが、分担はどうなっているのか？」
石渡会長「平成 15・16 年度委員の栗原委員と中村委員に依頼するつもり。」

２　会誌改革について（美宅；資料：議 2）
このメンバーでの運営委員会ではまだ議論されていないので、会長から簡単に現状報告があった。以下は資料の抜粋。

日本生物物理学会－会誌の将来についてのワーキンググループ　会誌改革について
平成 15 年 9 月 4 日
会誌の将来についてのワーキンググループでは、会誌の内容と出版形態について、運営委員会（2003 年 7 月）に基づき検討した。

（1）日本語の解説中心の会誌に対して、英語の一次論文ジャーナル部分を追加する。日本語タイトルは、「日本生物物理学会誌」、英語タイトルは、「Biophysics」とする。これはすでに雑誌としての承認を受けている。
（2）現在の日本語の会誌は、今までどおりの紙版と電子版を出版する。これに対して、英語一次論文ジャーナルは電子版でのみ出版する.
（3）日本語の会誌の編集委員会は今までどおりの体制で行う。英語の一次論文ジャーナルは編集実行委員長（仮称）を中心に比較的小さな規模でスタートする。
（4）新体制の会誌は、2005 年 1 月からスタートする。それに向けて、2003 年 9 月の総会で大筋の承認を受け、12 月の運営委員会で具体化する。4 月頃から宣伝を始める。
（5）印刷・出版会社としては 2 社を検討している。今までの実績、電子化の実力、出版費用等総合的に検討した。今後の出版には電子化がポイントとなるが、この点の詳細を詰めることを確認した。

美宅副会長から補足があった。英語タイトル名が「Biophysics」から「Biophysics (Tokyo)」（あるいは「Biophysics (Kyoto)」）に変更があった。日本語タイトルは「生物物理」ではないかと意見があった。この点は確認される。論文の数は、先日の柳田会長からの説明のように、ゼロでも良いと考える。出版会社の候補は二社あり、現行の出版社には電子化のノウハウが少ないので、こちらの負担大きくなることが予測される。もう一社の方は、すでに数多くの経験があり、こちらの負担は少ないと思われる。経費はあまり変わらないと思われる。
永山委員「一次論文だけでなくレビューも含まれるのか？」
美宅副会長「レビューも歓迎する。」
石渡会長「「生物物理」に英語で投稿があった場合に、それを e-journal に掲載することも可能なのでは？」
永山委員「東アジア全体の受皿的役割も考えた方が良いのではないか？」
などの意見が出された。
阿久津会誌編集委員長「現状では一社に和文誌の印刷を依頼している。仮に 05 年 4 月から e-journal を開始するに伴って印刷会社を変えるとすると、切り替えの時期には時間的・経済的ゆとりが必要になる。」
という意見が出され、美宅副会長・石渡会長に確認された。

３　その他
片岡委員「これだけ多くの学会員がいる中で、名誉会員が会長経験者に限られるのは惜しい。会長経験者に限らなくとも生物物理に多大な貢献をされた方はいらっし

ゃるので、名誉会員の規定を考え直しても良いのでは？」
石渡会長「次回の運営委員会で議論しましょう。」
国岡委員「男女共同参画のアンケートに答えて欲しいという旨を周りに広めて欲しい。」
諏訪委員「学会の実態の把握のためのデータは郷通子先生から行っていると思う。」
国岡委員「10 月の始めにある男女共同参画学協会連絡会の一周年記念行事の分科会（ポスドク問題・アクティブアクション（女性を優先する）・少子高齢化問題の三つ）に学会員に参加して欲しい。また、パネルディスカッションも開催。」

連絡事項：
１　次回運営委員会日程について　（石渡）
12 月 13 日 13：00～　早稲田国際会議場４階共同研究室 No. 6

以上

議事録作成：薬師寿治